

翻 訳

M. ブラウンリッジ, M. A. グレイグ著
『観光業と地域開発』

森 田 優 己

〔凡例〕

1. 本訳は, M. Brownrigg and M. A. Greig, "TOURISM AND REGIONAL DEVELOPMENT", The Fraser of Allander Institute, 1976. の全訳である。
2. 本文中, 原注を〔 〕内の数字で示し, 訳注は()内の数字で示した。

¹⁾
観光業は, スコットランド農村地区の繁栄に大きく貢献する, と広く信じられている。このような信念は, ある程度, 政策立案者たちによって助長されてきた。つまり, 彼らは, 観光業を, 客の面前で金銭登録機がチャラチャラ鳴り, 彼らの政策が即決かつ目に見える効果を及ぼしうる産業として認識してきた。しかし, この成果は, はっきりしたものであろうか, また, 実際にもそうであらうか。惜しげもなく浪費する客は, 問題をかかえた農村地区に, 経済的活性化の機会を与えることができるだろうか。それとも, 観光業から生じる経済的便益は, 観光客自身の出す排気ガスが大したことがないと同様, 全く取るに足らないものであろうか。

本稿は, スコットランドの多くの農村地区においてみうけられる経済的諸問題の性質について考察する。本稿は, 観光業が, これら諸問題の解決のためになしうる様々な貢献の仕方を検討し, そうすることによって, 地域開発における観光業の役割を評価する。

最初の課題は, 農村地区における, いわゆる「地域問題」²⁾の性質を考察することである。ここでは, どの要因がその問題の根本的原因であり, どれが単なる病状にすぎないのかを区別することが肝要である。というのは, 病状を和らげることを目的とする諸政策は, その病気の原因を直すことがあるとしても, それはただの偶然にすぎないであらうからである。

「地域問題」に関するありふれたモデル〔5〕でさえも, 役に立つ。その理由は, そ

れが、「地域問題」の性格に留意しているということだけではなく、解決を見い出せそうな地区を示していることにもある。そのモデルでは、「地域問題」は、地域における人口の増加率とその産業構造によって提供される雇用機会の増加率との間の不均衡が持続した結果として、時差的に現れる、と考えられている。人口の増加率が雇用機会の増加率を越える場合には、失業が現れる。この失業水準は、純粹に季節的な、あるいは、転職を原因とする失業に関する水準よりも高いであろう。事実、それは余剰労働力を意味し、この結果、その地域における取人は、他地域に比べて下落する傾向となろう。雇用機会の不足と相対的低所得とが結びつくと、その地域からの移動が起こるのであろう。この移動は、人口の増加率をある程度減少させ、それによって、失業を減少させるだろう。同時に、その地域における相対的低賃金と相俟った、失業した労働力資源の存在は、既存の企業からも、新たに立地しようとしている域外の企業からも、地域における若干の雇用拡大をひき出すように必ずや刺激するであろう。このように少なくとも理論的には、その地域の雇用を増加させよう何らかの刺激が存在し、さらには、その刺激が、失業を生みだした不均衡をまず第一に是正することになろう。

この型の分析は、通常、スコットランド中西部のような工業地域に関してなされる。実際のところ、その分析は農村地域にも同じように適用されているが、農村地域には、また、産業構造に関連する主要な問題がある。北海石油開発のような諸開発にかかわる新たな雇用機会によって、目下、便益を得ている農村地域もあるが、他の多くの地域では、今だに、農業、林業、漁業といった第一次産業に大きく依存している。たとえば、ハイランドでは、第一次産業の雇用は、1970年代初頭には、全雇用のほぼ10%近くに達していたが、それに比べ、スコットランド全体のそれは約5%であった。同時に、製造業の増大が、雇用機会の均衡をもたらすことはめったにない。たとえば、スコットランド全体では、製造業の雇用は全雇用のほぼ35%であったのに反して、ハイランドでは、14%であった。多くの農業地区においては、いっそうひどい状況である。その例をスカイ島にみるならば、労働力のたった6%のみが製造業に雇用されており、このうちの90%をかなり上回る雇用を、3つの企業が引き受けていた。戦後における技術の発達^{メンバ}は、第一次産業における人力の縮小をもたらしてきた。大部分の地区において、製造業やサービス業の雇用は、これら余分の人力を吸収するに十分なほど強力には、増加してこなかった。農村地区における産業構造のゆがみのもたらす効果は、そこでの雇用の増加率を不十分なものとしてきた。この結果、必然的に、地域の失業水準はひどいものとなっ

た。たとえば、ハイランドにおける失業率をみると、それは、スコットランドの数値をかるく上回り、実際、いくつかの農村地区における失業は、ハイランドの平均値をはるかに越えた高さである。

この余剰労働力が、農村工業における伝統的に低率な報酬や雇用の大半を占める季節的雇用に甘んずる結果として、農村の所得水準は、きわめて低くなる傾向をたどってきた。農村の失業の厳しさと低い所得水準との結合は、スコットランドの他の地域へ、また同様に、連合王国や海外への絶え間ない相当量の移動を引き起こしてきた。失業や移動に関する数字は、もっと人口密度の高い工業地域のそれよりもはるかに低いが、だからといって、農村地区における「地域問題」が、相対的に重要ではないということの意味しない。多くの場合、それは、いっそう厳しいものである。

諸要因を是正しても、普通の地域ほどはうまくいかないようだ。人口移動は、短期間で人口増加の圧力をかなり減少させるかもしれない。しかしそれによっては、何も解決しえない。ここでの移動者は、必ずしも単なる失業者というのではなく、若者や熟練者や教育のある人や大志をもった人であることが多い。これは、2つの重大な効果をもつ。第1には、地域からの若者の減少は、人口を相対的に高齢化させるということである。たとえば、スコットランド全体では65歳以上の人口は12%であったが、スカイ島では21%であったようにである。第2には、熟練者や大志をもった人の減少は、地域に残った労働力とその経営者側との双方の質を損うということである。また、相対的な低賃金が、その地域における雇用拡大への刺激となるとも思えない。移動が長びくなかで、たとえ、地方企業に経営上の独創力や意欲が残っていたとしても、停滞あるいは衰退しつつある状況下では、地方企業は、多角化への投資誘因をほとんど持たない。同様に、どうして、域外の企業が、その地域に魅力を感じる事ができようか。余剰労働力というものは、実際よりも多く表われているかもしれない。つまり、失業者とは、相対的に老齡かつ廃人化寸前の状態であるかもしれない。また、何か新しい産業を設立するためには訓練計画に費用が掛かるであろう。さらに、生産費の〔低さ〕あるいは、集積利益は、主要市場を離れることによって生じる輸送費の〔増大〕を相殺するに十分ではなからう。

地域内部からの再生の見込みがほとんどないことは、はっきりしている。その地域が、もし、へき地や農村であるなら、外部の自由気ままな企業にとって、特に魅力的であることなどありそうもない。救済事業に関する責任は、地域政策立案者の肩に、どっしりと重くのしかかっている。もし、彼らが責任をはたそうとするならば、少なくとも幾分

か新しい型の経済活動を導入することによって、地域内部で雇用を生み出さねばならない。この責任をはたす段になると、多くの政策立案機関は、農村地域を開発するための政策手段として、観光業に頼って来たのである。

観光業を奨励するという彼らの決定は、正しかったのだろうか。観光業は、その地域における所得を適切に引き上げるだろうか。観光業は、その地域における雇用機会の改善にとって有効な手段であろうか。農村経済は、現存の諸困難から脱け出すことができるだろうか。観光業の経済的便益は、その社会的費用と環境整備費用によってどの程度削減されるであろうか。

観光業の経済的便益

以上述べたように、農村地域はまさにその性質のゆえに、域外の企業を誘引することがない。それは、ある場合には、人口の年齢構造という理由で、またある場合には、主要市場や供給者からの孤立という理由においてである。これらの特色は、農村地域を、観光業にとって魅力的なものにすることもある。実際、農村地域のへき地性や農村の性格は、ますます都会風になり行動力あふれる人口にとって、魅力的である。さらに、観光業では、消費者が生産者のところへやって来るのであり、こうして、少なくとも輸送費問題の一部はかたづくのである。最後に、連合王国の状況からみても世界的にみても成長産業である観光業は、拡張のための新たな立地を求めている。実際に、観光業は、へき地の農村地区において、相対的により大きく成長してきたといういくつかの証拠〔11〕さえもある。観光業は、地域に刺激を与えるための理想的な政策手段を提供するように見えるし、また、実際、そのようなものとして、政策立案者によって認識されてきた。この問題を扱った文献の一部は、次のような姿勢で、観光業を奨励している。

「たとえどの指標を調べてみても、観光業が……大事業であることは圧倒的に明白であり、かなりの程度まで成長し、より重要な役割さえも演じるようになると予想される……」〔11〕

「観光業全体にとって魅力的な要素を持ち、さほど開発されていない（地域）にとって……観光業は、開発過程における先導部門となる可能性がある」〔4〕

要約すると、観光業を支持する論拠は、それが、農村の産業構造に新たな成長をもたらすための手段を用意し、短期的にも長期的にも便益をもたらすということにあるよう

だ。つまり、観光業は、訓練や熟練をそれほど要しない新しい型の雇用を導入するのであり、また、域外の消費者をその地域に引きつけることによって、地方経済に、支出と所得という大量の新しい注射を打つというわけである。

観光業について主張されているこれら便益は、もっと厳密に検討されねばならない。どのようにして、観光業は地方の所得水準を上げるというのか。一見したところでは、3つの効果があるように思われる。まず第1に、その地域における観光客の支出は、かなりの現金を注射するはずである。第2に、観光業の営業は、他の地方産業に対して、市場拡張の機会を用意するはずである。そして第3に、その地域内部におけるこれら支出の循環は、何らかの所得乗数効果を、すなわち、追加所得を生むはずである、と。

観光客が地域へ流入することによって、地方での支出額がかなり増大するのは、明白である。グィニッド氏による観光業に関する最近の研究〔2〕は、1973年6月から9月にわたって、278万人の客が、約4,100万ポンドを使ったと概算した。短期滞在の休暇旅行型の観光客が多いスカイ島においてさえ、我々の概算では〔6〕、1973年1年間に約275,000人の観光客が、200万ポンド以上のお金を使ったことになる。

問題なのは、このような大量の現金注射が、地方の経済的便益をいささかも創出することなく、まっすぐに漏れ出していくということである。観光客の主要な支出項目である宿泊をとりあげてみれば、非地方的所有者への利潤、非地方的労働者への賃金という形態で漏出していることがわかる。その漏出の大部分は、その地域に移入された商品やサービスの見返りとしてである。

同様に、観光業が、他の地方産業の拡張を刺激するという主張に対する実証的裏づけは、ほとんどない。産業間の結びつきは、きわめて弱い。再び宿泊をとりあげてみるならば、現実的な結合関係の欠落は、観光業が、地元からの供給品を使わないことを反映しているのであろう。観光業は、簡単に調理できるように包装されたインスタント食品に大きく依存している。同様の依存は、観光客の支出項目のほとんどに当てはまる。スカイ島の土産物産業でさえ、観光客は地方工芸品を強く望むにもかかわらず、海外および連合王国の他の地方からの移入品に非常に大きく依存していた。観光業と他の諸部門とのこのような結びつきの弱さは、地方産業が観光業から得る市場拡張の機会が、せいぜい限定されたものにすぎないことを意味している。

結局、乗数過程、つまり、新たな支出循環からの追加的所得の発生もまた、農村地区においては、大変弱いものである。これは、貯蓄と課税がきわだって特殊なかたち

で漏出するためというよりむしろ、農村の狭い経済基盤において自給自足の水準が低いからである。地方住民による購入物が、その地域内部で生産される商品から供給されうことはめったにない。観光業のもたらす効果は、地方住民に対する所得の発生を、さらにいっそう制限することである。すなわち、乗数効果は、きわめて弱いのである。(これは、地域における産業開発の何らかの他の形態にも、等しく、当てはまるであろう。)

観光業が地方の所得に及ぼす効果は、期待するほどのものではない、という合意がみられるようになってきた。セントアンドルーズ地方に関する研究〔3〕によれば、観光客が支出する1ポンドのそれぞれに対して生み出される地方の所得は、たった34ペンスにすぎないだろうと見積もられている。アングルシー地方における観光業に関するその後の研究〔1〕も、観光客の支出1ポンドあたりに生み出される地方の所得は、25ペンスから33ペンスの間であろうと見積っている。我々自身によるスカイ島に関する概算では、観光客の支出1ポンドにつき約30ペンスのみ地方の所得が発生するであろうことを示した。観光客の支出から生じる便益は、実際以上に大きく見える。つまり、観光客の支出は多くの騒音や活動を伴うが、その日の終わりに地域住民が得る成果は、意外にも、ほとんどないのである。

観光業は、地方の雇用に、どのような効果を与えるだろうか。それは、相対的に労働集約産業であり、明らかに成長産業であり、大半の農村地区に対して新たな雇用機会の拡大をもたらす。ここでもまた、一見したところでは、観光業内部での直接的雇用という点からも、地方経済の他の部門における間接的雇用という点からも、観光業が、農村経済に対してかなり大きく貢献するように思えるだろう。

直接的雇用による地域への便益は、次の2つの要因、すなわち、地域に居住していない労働者を使う程度と、その提供する雇用の型によって影響を受ける。事実、観光業は、大半の地域において、移住労働者に大きく依存しているようであり、ホテル部門では、特にそのようである。たとえば、スカイ島では、ホテルの全従業員の42%以上が、地域に居住していないことがわかった。湖水地方における観光業の研究〔8〕は、移住労働者への依存がより大きくなっていることさえ発見した。明らかに、移住労働者の利用が増えれば増えるほど、地方住民にとっての直接的な雇用の機会はどんどん減少していく。

観光業によって提供される雇用の型に関連した問題もある。第1に、雇用の型は、相対的に熟練を必要としない傾向をもち、主要労働者は、観光シーズン中のみ移入される。カリブ海地域において、きびしい批判〔12〕にさらされた特徴は、次のようなものであ

った。

「……観光業は、我々を、ボーイと料理屋の女給という人種に変えてしまった……」
第2に、観光業は、主として女性むけの雇用を提供する傾向がある。たとえば、H I D B³⁾の算定によれば、ハイランド全体をとると、ホテルや料理屋での最盛期における雇用は、その70%以上が、女性に対するものである。最後に、観光業の雇用は、通常きわめて季節的でしばしばパートタイムの性格をもっているが、これは必ずしも、不都合なものではない。というのは、既婚婦人のような地方の従業員、あるいは、嘱託で働く人々はだれでも、年間を通じたフルタイムの仕事よりも、この雇用型を好むようであるからである。間接的雇用の発生は、先に論じたような産業間の結びつきの弱さと現金注射の漏出のひどさによって、かなり制限されるようだ。実証的研究によれば、間接的雇用の主な領域は、工芸産業と建設業であり、後者は、観光業に関連する維持および拡張業務から便益を得る。しかしながら、多くの間接的業務は、観光業の需要が、たとえば、小売流通業や地方の輸送サービスにおけるように季節的なものであるため、地方の援助をうけざるを得ないと認めなければならない。

観光業は、地方の雇用発生に全体としてどれぐらいの効果を、及ぼすのだろうか。実証によれば〔1, 6, 10〕、観光客の支出10,000ポンドにつき、3ないし5の業務が創り出されるであろう。しかしながら、このように数字で表わされた雇用の広がりには、その地域に対する雇用の便益をかなり過大視したものと言ってもよい。第1には、この雇用の一部は、移住労働者によって担われるだろう。第2には、男性の持続的失業が主要な問題であるのに反して、雇用の大半が女性むけのものであろう。最後には、もしもアピモア⁴⁾町のように相対的に独特な位置にあるのでなければ、その雇用のすべてが、季節的な性格をもつことになる。スカイ島において、我々は、男性の失業を示す数値には、観光業による雇用発生⁴⁾の効果が相対的にほとんど及ぼされていないということを明らかにした。つまり、1968年から1973年にかけて、6月の男性の失業を示す数値は、決して、8%を下ることはなかった。湖水地方やデボン地方、コーンウォール地方における観光業についての研究〔8, 9〕もまた、観光業に関連する諸事業（相対的には、あまり貢献してはいないが）以外には、多くの男性の、かかわりあいを跡づけることはできなかった。それゆえ、農村地区において問題の核心をなしている男性の失業が、観光業によってなくなることは、ほとんどないと思える。それは、一つには、提供される雇用の性格のゆえであり、一つには、観光シーズンの最盛期が、第一次産業のかき入れ時とも、建

設業のそれとも重なるためである。つまり、観光業の主要な貢献は、これら地区における女性にとっての地方での「かせぎ率」を高めることである。

「地域問題」に関するありふれたモデルからみて、観光業は、地域からの純移動にどのような効果を及ぼしうるのであろうか。当初、移動は、農村経済内部における所得の低さと雇用機会の貧困さという表裏一体をなす圧力に関連していた。これまでみてきたように、観光業は、地方の所得や雇用に対して、それがたとえ季節的かつ最初に思ったほど大きくはないにしても、何かしら援助を行う。このような改善は、移動の減少として現われているだろうか。

実証的研究は、明快な解答を提供していない。我々は、スカイ島で、独特な相互的移住というかたちでの流出の証拠を見つけた〔6〕。それは、1961年から1971年にかけて、45歳までのすべての年齢層では激しい人口減少がおこったが、老人層での隠棲のためと思われる移入というかたちでの流入がこれを相殺した、ということである。ルース氏〔9〕は、デボン地方およびコーンウォール地方において、非常に類似した形態を見つけた。カプスティック氏〔8〕は、湖水地方において、観光業による物価上昇が、第1次産業の衰退的諸力を克服するには不十分であることを見出した。つまり、それは、農村の人口減少を緩和したが除去することはできなかったということである。

スカイ島で、我々は、次のように主張する人々に出くわした。観光業による収入やかせぎは、それが季節的なものであるとはいえ、物質的に苦もなく楽もない生活を可能にするので、スカイ島に帰って来たのだ、あるいは、残っているのだ、と。しかし、我々の印象では、スカイ島に出たり入ったりの「いたちごっこ」⁵⁾を放棄してしまった人々の大半は、より安定的で有利な雇用を求めて出て行った人々であろう。これは、スカイ島からの移出者数によって裏づけられよう。家族の長たる男性が失業しているか、または、地方で臨時的かつ季節的な仕事につくことしかできない場合、女性に対する雇用機会があっても、家族がそれに依拠するには不十分である。

それゆえ、観光業は、低所得、失業、移出というような「地域問題」の病状に対して、予期された以上に限定的な効果しか及ぼさないように見えよう。観光業の全体的貢献についての評価は、観光業が、「地域問題」の根本といえるほどの弱点である農村地域の産業構造の組み立てを、よりうまく改善することができるかどうかにかかっている。

表面上、観光業は、農村地域における典型的に限られた産業構造を多角化するための

手段を用意する。さらに言えば、多くの既存の農村工業における停滞と衰退が及ぼす効果を相殺するために、成長産業の導入をも伴う。結局、観光業を支持する者の多くは、それが、有益かつ推進的な産業であり、それ自身の成長を地方経済の他の部門へと伝えていくことができる、と論じてきたのである。

観光業は、確かに、何らかの多角化をもたらすが、それによって提供される雇用の性格を前提するならば、男性労働力に対する雇用を広げることはほとんどない。第2に、観光業が過去において相対的に円滑に成長したという記録は、旅行費用の実質的増大と現今の景気後退の影響とを反映して、最近、鈍ってきている。さらに、観光業の成長は、地方の他の諸部門の成長をかなり圧迫することとなろう。民間部門の資本が、他の地方産業から観光業への投資へと転じられる場合には、これは、他の地方産業の潜在的成長力に、かなりの影響を及ぼすであろう。同様に、全体的な予算制約がある場合、観光業に対する補助金や貸付金という項目での公共部門投資は、他の種類の地方産業への投資を犠牲にしてなされる。

第3に、もし、観光業が、地方経済の成長に大きな刺激をもたらすことを期待するならば、何がしかの失望を味わうことになりそうだ。他の地方産業との結びつきが弱いということが、いかな拡張の「波及」効果でも減じる傾向をもつであろう。つけ加えれば、観光業は、他の地方産業に、せいぜい、労働者と経営者の訓練あるいは技術移転という限られた形態での便益を授けるにすぎない。結局、ただ補足的かつ季節的な雇用を提供するだけの産業は、地方経済に対して、確信をもって推進の部門としてふるまうことなどありそうもない。

ありふれたモデルの狭い限界内においてさえ、観光業が、農村地区における「地域問題」のための真の救済方法を用意することはなさそうに見える。確かに、観光業は、援助の手を差しのべるだろうが、しかし、救済するに十分ではなさそうである。

社会的および環境的諸効果

観光業には、モデルの枠内で都合よく検討することはできないが、それでもなお、その地域にとってかなりの重要性をもつようないくつかの他の局面がある。これらは、大きく2つの範疇に分かれる。すなわち、外部的および環境的効果と社会的および文化的

影響とである。

外部のおよび環境的要因は、他でよく実証されている。それゆえ、以下のように概説するにとどめておく。観光業の発達は、観光業それ自体に対して外部的な便益を創り出すであろう。他の地方産業も住民も、観光客のために用意された諸施設やインフラストラクチャ、たとえば、レクリエーションセンターの建設や交通機関の改善からの便益を受けていると言えよう。第2に、観光収入は、地方の住宅構造の質を改善するために、あるいは、記念碑および歴史的建造物の維持と修繕のために使うことができる。最後に、観光業は、保護地区や国立公園をつくるための口実を用意することができる。

他方で、観光業は、受け入れ地域に対して、はっきりと有害な効果を押しつける。セカンドハウスあるいは隠棲のための住いに対する域外からの需要は、農村地区における土地家屋の価格をつり上げ、そこでの人口減少の一因となる。第2には、諸地区における交通の流れや駐車という物理的圧力は、混雑や騒音、建造物の破損といった高い費用を地方社会に課すのであるが、それへの対策は、これまで一度も講じられたことがない。最後に、目に見えるかたちでの汚染と生態学的汚染という対をなす問題がある。はじめの場合の明らかな例は、目をおおいたくなるような旅行者の群れ、キャンプ跡、散らかされたごみくずである。次の場合は、下水処理設備の過重負担による生態上の被害や海岸砂丘の侵食、内陸部への被害、農耕用家畜類や野生生物への一般的な侵害にかかわる問題である。

すべての産業が、何がしかの汚染に対して罪を犯している。観光業の場合、この外部費用がどれほどの高さであるかは、受け皿となる地区の性格と観光業が被むる観光客の圧力の程度とに、大きく左右される。多くの地区では、観光業は、相対的に苦もなく吸収される。しかしながら、より人気のある地区では、観光業の外部効果は大部分季節的なものとはいえ、きびしい問題をひき起こす。

おそらく、経済学者は、先入観を分析に変える場合、観光業の社会的および文化的便益にあまり深くふみ込むべきではなかろう。社会的および文化的効果は重要であるが、それにもかかわらず、観光業に関する文献を読みにくくしている原因でもある。

社会的および文化的便益を主張することは、ますますまれになってきた。ある著者は、今だに、地方社会の外部からの客とかかわりが、偏狭な視野を広げることによって、地方住民を利するのだ、と論じている。これがスカイ島に妥当するかどうかを地元民にたずねることは、何と恐ろしかったことか。他の著者は、観光業が、たとえば、はげしい

競争や物欲主義を持ちこむことによって、厳格で伝統的な社会形態の破壊を助けより早い経済成長をもたらす、と論じる。ここで我々は、スカイ島の人々が、彼らの底ぬけの浪費癖⁶⁾のおかげで、数年間、有名になっていたことをしみじみ思った。おそらく、発展した社会における最も有力な議論は、観光業が、地方の定期市や祭礼、風習、工芸、民間伝承の保護を促進するというものであり、紛れもなく、観光業が、これらに対する何らかの形態の市場をつくるというものである。

特に、観光業が過度の地域開発を許されてきたところでは、現実的で深刻な諸問題が惹き起こされる。このうちの第1の問題は、観光客の比重に関係する。この比重は、観光客と地方住民との対決度をも地方住民の観光業への依存度をも表す指示器である、と言われている〔7〕。観光客の数が相対的に少ない時には、お客と主人という型の関係が成立し、心からの歓迎や厚遇、思いやりがみられる。しかしながら、人数が増えると、このような関係を維持することは物理的に不可能になる。そうすると、地方住民がいっそう営利的になり、観光客は、期待したように歓迎されないのでだまされたような気持ちになり、彼らの失望は憤りへとたやすく発展していく。そして、地方住民も観光客も、共に憤ることになる。スカイ島で、観光客にインタビューしたところ、我々は、憎愛関係の多くの徴候を見出した。それは全く気候のせいでもそこまで発展したわけではない。しばしば、地方住民の憤りが向けられるのは、特殊な型の観光客であり、彼らは、地域にほとんど貢献しないばかりか、地方住民に特別な費用を課していると思われる。スカイ島に関する我々自身の発見は、イギリス観光局の行った南東部における観光業についての意見調査によって裏づけられる。つまり、日帰り観光客や移動住宅で群れをなして旅行する人々は、特に不人気である。その少なからぬ理由は、彼らが、他の型の観光客に比べて、地方にお金を落とすことがずっと少ないように見えることにある。我々は、怒ったハイランド人から、こう告げられた。

「あなた方は、旅を続けることができる。

しかし、観光客が我々に残すものと言ったら、空罐とごみだけだ……」

第2の主要な問題は、文化的墮落の1つである。ここで心配なのは、地方文化が、観光客をひきつけるために希薄にされたり、商業的に改造されたりはしないかということである。チュニジア〔13〕では、観光客のよび物の1つが、その地方の伝統的で華やかな結婚式である。しかし、その地方の結婚式に対する観光客からの需要は、供給をはるかに越えている。そこで、お金と引き換えに、偽の結婚式が、そうだとばかり信じきっ

た観光客のために上演されている。ハイランド地方の、いわゆる「気楽なついで⁷⁾」もこれと同じようなものなのだろうか。地方住民から聞いたところによれば、本当のハイランド文化は、観光シーズンには見られなくなってしまい、再び登場するのは冬のみである。多くの人々は、このような2重文化が発達し、商業が本当の文化を究極的には窒息させてしまいはしないかと案じていた。

第3の主要な問題は、観光業の急速な発達が、地方的コミュニティ内の社会階層間に緊張を生み出すのではないかということである。これは、観光業による経済的便益が2～3人の手中に集中する場合に起こりうる。あるいはまた、客の行動の模倣から起こるかもしれない。この場合、客の行動の模倣が、地域に深く根づいた信念、たとえば、若者と老人とは永久に対立するものだという考えや、地方の厳格な宗教上の態度と衝突するのである。もう一つの起こりうる問題は、観光業における雇用は主として女性に対するものであり、それゆえ、伝統的に男性支配の農村社会において、女性が主要なかせぎ手になるということである。とりわけ、もし、男性の失業がきびしくかつ持続するとすれば、ショービニユイック婦人労働者の新たな金銭的地位やその独立心を前提すれば、愛郷主義的態度はあつれきをおこすであろう。

これら諸効果を量的に表すことは困難であるが、我々の見解では、観光業の社会的および文化的費用は、その便益を非常にやすやすと越える。いずれにせよ、現実の問題は、そのコミュニティの性格と、それが被むる観光客からの圧力の程度にかかっているだろう。観光客にとって人気のある地区が、独特なまた伝統的な文化を持っている場合には、社会的および文化的緊張が大きくなる。今までのところ、我々は、財産や人に対する物理的暴力がふるわれているカリブ海または地中海沿岸の一部における最近の明らかな敵対状況を体験するにはほど遠い。連合王国においては、不幸にも、緊張や対立状況が生じる可能性が認められているようだが、これまでは、そういった行動はほとんどおこらなかったのである。

ま と め

結局のところ、観光業の役割は何であろうか。農村経済が停滞ないしは衰退すらしてきている状況下では、何らかの大きな経済的回復が、その地場産業から生じる見込みが

ないことを、我々は示唆しておいた。同様に、これら農村地区の多くが立地的に不利なので、域外の諸企業が、経済回復に十分な数だけ誘引されることはありそうにもない。そうすると、これら地域の経済的回復は、大方、政策立案者の責任であり、我々の見解では、彼らは、地域開発の手段としての観光業に過度にたよりすぎてきた。

その記録的な速度での成長、政策的尺度からみて相対的にすばやい反応、「成果」を目にみえる形で示されるというような観光業の特質が、ある程度、彼らを勇気づけてきた。だが、我々は、観光業の経済的効果の多くが表面的なものであること、そして、観光業に求めた経済的便益は、その多くがほとんど幻覚的なものになってしまうと言いたかったのである。我々は、本稿の初めに提起した疑問に対する自らの解答が、全く気の減入のものであることに気づいている。

観光業は、その地域における所得を大きく引き上げる推進力たりうるであろうか。それは、総支出から期待される額よりもはるかに少ない。観光業は、その地域での雇用機会を改善する効果的な手段であろうか。主として改善されるのは、女性にとっての雇用機会である。観光業は、農村経済を当面する諸問題から解き放つことができるであろうか。それは、とうていできそうにもない。観光業の経済的便益は、その課す社会的費用および環境整備費によって、どの程度、削減されるのであろうか。若干の地区では、かなりの程度削減される。観光業は、農村地区の「地域問題」を解決しうるであろう。それは、病状のいくつかを和らげるかもしれないが、根本的原因を治療することはできそうにもない。

それでは、我々は、観光業にどのような役割を期するのであろうか。いっそうへき地のいくつかの農村地区においては、観光業のほかには、どんな現実的回復手段も見当たりそうにもない。そんな場所では、明らかに、政策立案者たちは、観光業に頼る以外に選択の余地がない。しかし、我々が言いたいのは次のことである。政策立案者は、観光客の流れを集中させることよりもむしろ分散させることを強調すべきである、ということである。より一般的に言えば、かかる場所においては、他の形態での経済活動を発達させる若干の可能性があるだろうということである。こういう状況のもとでは、観光業の雇用面における特質や他部門との結びつきの弱さを前提とするならば、我々は、観光業がすぐれた推進力をもった部門となるということを認めるわけにはいかない。しかしながら、まさにこうした特質が、観光業を、その他の産業部門の発達を補助する卓越した産業としているのである。観光業は、確かに、1つの役割を持っている。しかし、そ

れは、我々の見解では、補助的な役割でしかないのである。

もしも、農村地域が、停滞と衰退から抜け出すとすれば、幅広い戦線で成長を達成した場合のみそうなる。観光業に伴って他の諸産業が発達し、フルタイムの男性雇用を提供することが重要なのである。そうでなければ、「地域問題」の古典的病状は持続するであろう。かなり均衡のとれたこの成長ができなければ、いくつかの地域は、観光業への過度の依存をどんどん進めることになろう。たとえば、スカイ島では、すでに全雇用の72%がサービス部門に従事し、ホテルや料理屋での雇用は、スコットランド平均の実に7倍である。ある著者は、「不安定な基盤にたった観光業は、幻想である」と評したことがある〔13〕。我々に言わせれば、不安定な基盤にたった地域経済の全体が幻想である。

もしも、観光業がもっと市場諸力にゆだねられたなら、我々の見解では、それは今だに成長を続け他の形態の経済開発を援助したことだろう。このことが、政策立案者をして、農村地域のために他の形態の経済活動を捜し出し、それを促進するという否定すべくもなくいっそう困難な課題に、自由に、より多くの資源と努力を費やさせたことであろう。

〔訳者あとがき〕

ここに訳出した『観光業と地域開発』は、観光業が、地域経済を活性化させるかどうかについて検討したものであり、スコットランド西部に位置するストラスクライド大学のフレイザー・オブ・アランダー研究所発行の小冊子である。それは、英国スコットランド地方を例にとり、農村地区における「地域問題」の性格を基本にすえながら、観光開発が地域に及ぼす、雇用、所得、産業連関、産業基盤整備などの経済効果と、文化、環境などの経済外的効果を、費用便益の点から分析したものである。

日本においても、高度成長期に重化学工業中心の奇型的経済発展が行なわれた結果、地域の不均等発展がもたらされ、過密化し、膨張を続ける都市に比べ、農山漁村は、過疎の進展によりさびれるいっぽうである。低成長期の今日、農山漁村の地域振興が議論されるようになったのであるが、その振興策の中心は、観光資源の喪失と交通網整備を基盤とした観光開発である。しかし、それは成功しているであろうか。個々の地域により差異があり、一概に言うことは難しいが、安易な観光開発が地域を活性化しうるとは言いがたいのではなからうか。

上記文献に述べられた視点は、日本と英国という違いもあり、個々の地域のかかえる

地域問題の質にも差異があり、一律にあてはめることはできない。そのまま日本全般にあてはめることは危険であるが、ここで述べられた視点は、現代の地域開発を考える上では大きな意義をもつものである。

参 考 文 献

- [1] Archer, B., *The Impact of Domestic Tourism*, University of Wales Press, 1973.
- [2] Archer, B., Shea, S., and de Vane, R., *Tourism in Gwynedd*, Welsh Tourist Board, 1974.
- [3] Blake, C., and McDowall, S., "A Local Input-Output Table", *Scottish Journal of Political Economy*, No. 14, 1967.
- [4] Bond, M. E., and Ladman, J. R., "Tourism: A Strategy for Development", *Nebraska Journal of Economics and Business*, Winter 1972.
- [5] Brown, A. J., "Some English Thoughts on the Scottish Economy", *Scottish Journal of Political Economy*, November 1969.
- [6] Brownrigg, M. and Greig, M. A., *Economic Impact of Tourism in Skye, Highlands and Islands Development Board*, Special Report 13, December 1974.
- [7] Bryden, J. M., *Tourism and Development: A Case Study of the Commonwealth Caribbean*, Cambridge University Press, 1973.
- [8] Capstick, M., *Some Aspects of the Economic Effects of Tourism in the Westmoreland Lake District*, University of Lancaster, 1972.
- [9] Lewes, F. M. M. et al., *The Holiday Industry of Devon and Cornwall*, HMSO, London, 1970.
- [10] McNicoll, I. H., *The Shetland Economy—An Empirical Study in Regional Input-Output Analysis*, Research Monograph No. 2, The Fraser of Allander Institute, University of Strathclyde, 1976.
- [11] Nicholls, D. C., "Tourism in Scotland", Paper given at a Symposium on Leisure, University of Edinburgh, May 1972.
- [12] Perez, L. A. S., "Aspects of Underdevelopment: Tourism in the West Indies", *Science and Society*, Winter 1973.
- [13] Rivers, Patrick, "Tourist Trouble", *New Society*, February 1973.

1) tourismは、従来、観光と訳され、「『楽しみを目的とする旅行』という人間の社会的行動を示すもの(狭義——森田)」と、「(上記したような)旅行とそれにかかわりをもつ事業の総象」といったさまざまな事業活動を含んだもの(広義——森田)と定義されてきた(前田勇・岡本伸之,「現代観光の構造」, 1ページ, 前田勇編著,『観光概論』, 学文社, 1978年)。しかし、筆者たちは、産業としての観光について論述しているので、ここでは、tourismを観光業として訳出した。

2) 大文字で、Regional Problem とあったので、筆者が「地域問題」とした。以下、同様で

ある。

- 3) おそらく、Highland Industry and Development Bureau ハイランド産業開発局の略称であると思われる。
- 4) アビモア町は、冬はスキー、夏はハイキングで、年間をつうじて賑っている。
- 5) 原語は、“rat race”となっている。
- 6) 原語は“bottomless sporrans”であり、直訳すれば「非常に深いスコットランドの財布」ということになる。
- 7) 原語は、“plastic ceilidh”であり、スコットランド人は「ケーリー」と呼んでいる。これは夕方になると、音楽を聞きながらダンスをし、酒をたしなむという村人の集いである。通常は村のホテルなどで行なわれている。